

5 男子については？





Cristina Uza/UNICEF/2003

学校や教育制度をもっとジェンダーに配慮した、女子にやさしいものにするといっても、それによって男子にとっての魅力や居心地のよさが減るわけではない。むしろまったく逆である。実際には、もっと安全で、生活や未来に関連があり、エンパワーメントにつながるような教育を女子が経験できるようにするために進められている改革のほとんどすべては、男子にとっても役に立っている。じつのところ、女子教育の促進は、「万人のための教育」の目標を達成し、ミレニアム開発目標を達成するうえで戦略的にも優れたものなのである。

たとえば乳幼児総合ケアの拡大・発展によって利益を得るのはすべての子どもであり、女子には限られない。同様に、自宅や家の畑で働かなければならない子どもたちも学校に来られるよう時間割を柔軟に組めば、それによってもっとも利益を得るのは女子かもしれない。しかし、家の内外で働いており、このような対応がとられなければ機会を否定されるであろう世界中の男子にとっても、学校に行くことが可能になる。学校が子どもの家の近くになれば、女子がもっと学校に行きやすくなるし、女子自身にとっても親にとっても通学中のことをそれほど心配しなくてよくなる。そして、そのことによって男子も学校に行きやすくなるのである。

同じことは、学校で水やトイレを用意したり、校舎をきちんと保全・維持したりすることについても言える。学校環境から暴力がなくなることも、女子のみならず男子にとっても明らかな利点である。時に校庭は、身体的に弱い者が搾取され、仲間外れにされた者が被害を受けたりいじめられたりする、残酷な場所になることがある。学校を安全な場所にするには、このような事情を踏まえ、女子と同じぐらい男子のためにも熱心に追求されている目標なのである。

さらに根本的なこととして、女子教育の増進において鍵となる要素は何かということを考えて見なければならぬ。それは、子どもたちひとりひとりのニーズに積極的に応えることのできる、子どもにやさしい、ジェンダーを意識した教育方法の開発である。女子のほうが男子よりもこのような教育アプローチの変革を必要としているかもしれないが、それが実行に移され

たときに生まれてくるのは、すべての子どもにとってよりよい、一層の配慮に富んだ、子ども中心の教育であり、男子ももっとすばらしい学習経験を積むことができるようになるのである。

米国国際開発庁が8カ国で実施した大規模な評価では、女子教育を向上させるためのプログラムや政策から、男子も一貫して利益を得ているという結論が出た⁽⁷³⁾。学校の質を高めるための取り組みから女子のみならず男子も利益を得ているというだけではなく、男子の就学率も女子のそれとともに上昇したのである。男子が直面する問題は、女子にとっての問題とそれほど違いがない。アクセスしにくいこと、教育の質が貧弱なこと、近くに学校がないこと、親が教育を支持してくれないことなどである。女子の就学者数を増やすためにこのような問題に対する対策がとられれば、男子——とくに傷つきやすい立場に置かれた、または周縁化されたグループの男子——も恩恵を受ける

ことができる。

ジェンダーに配慮した教育制度を世界中で発展させていこうという目標は、かなりの程度、女子だけではなく男子にとっても役に立つものである。にも関わらず、一部の国や地域——先進工業国の多くも含む——では、男子の成績の低迷や学校からの離反こそが懸念の対象とされていることを、重要な問題として認識しておかなければならない。

取り残される男子

一部の国々では男子の就学者数のほうが女子のそれよりも少ない。ユニセフが55カ国で実施した最近の世帯調査のデータでは、女子の出席率が男子のそれよりもはるかに低い国のほうが多いことは明らかであるものの、男子が教育制度から取り

教師とコミュニティの指導者たちは、演劇、スポーツ、詩のワークショップを活用し、男女の子どもたちを分け隔てなく教育するとともに、広くコミュニティに大切なメッセージを伝えた。



残されている国もあることが、確認されている（「ボックス5．女子に対する男子の純出席率」参照）。ボツワナ、レソト、モンゴル、ナミビアのような国では、その主たる原因は、男性が賃労働先を探している間に男子に家の家畜の世話をさせるためである。しかし、ラテンアメリカ・カリブ海地域のほとんどの国でも、このような牧畜の伝統が根づいていないにも関わらず、同じように男子の就学率のほうが高く、男子が学校にひとりもいないことさえあることが明らかになっている。

ラテンアメリカ・カリブ海諸国では、男子のほうが女子よりも留年率が高く、成績水準も低いのが一般的であり、一部の国では学校の欠席率も高い。ブラジル（1996年）では、男子が正式な教育を受けた平均年数は5.7年だったのに対し、女子は6年だった⁽⁷⁴⁾。ジェンダー格差が生じるのは男子が10歳前後のころであり、女子よりも高い割合で学校を離れ始める。15～17歳になると男子の

ボックス5

女子に対する男子の純出席率

コロンビア	0.81
ハイチ	0.84
レソト	0.45
マダガスカル	0.82
マラウイ	0.84
モンゴル	0.82
スリナム	0.73
タンザニア	0.81

（7～14歳の子ども）

出典：ユニセフ（2003年）

パネル9

トルコ：学校演劇が国の心を動かす

若い女性が舞台に立ち、観客に直接話しかける。「嫁入り支度なんて、したくない。学校に行きたいし、自分の教科書がほしい」。会場に衝撃が走る。しかし、チッデム・イルディスは、自分の親に数え切れないほど言ったセリフをそのまま口にしていくだけである。彼女は、他の子どもたちが学校に行くのを見ながら、自分にも同じようにさせてほしいと懇願していた。

彼女が住むトルコ東南部のバン州では、女子は家の仕事をするとともに、若くして結婚する準備をするようにと育てられる。紙に夢を書き出すかわりに、チッデムや彼女のような少女たちは、刺繍や、この地域の主要産品である敷物の図案で自己表現することを覚えるのである。少女たちは沈黙を身に

つけるが、今夜の劇場ではこの沈黙が打ち破られた。チッデムは役をこなしているだけかもしれないが、それは彼女自身の人生に題材をとった役なのである。

チッデムは、自分が学ぶ機会はとっくに去ってしまったと思い、妹のギュルベートとエスマには同じ轍を踏ませまいと決意していた。ところが、彼女自身にもチャンスが訪れたのである。そのチャンスは、2000年にムラディエ地区に開設された、開かれた小学校学習センターという形で訪れた。これは、トルコ開発財団、国際労働機関、国連開発計画、国連人口基金、ユニセフが開始したパイロット・プロジェクトの成功を受けて、5つの州の全域で設置されたセンターのネットワークのひとつである。

これらのセンターは、初等義務教育を修了できなかった少女たちに2度目の機会を与えることを狙いとしている。少女たちを、自分の家での家事労働の負担から解放することも目的のひとつである。少女たちは開かれた小学校に入学するよう奨励され、家庭学習の支援も受けた。センターには、コンピューター、OHP、ビデオ再生機、テレビも備えつけられていた。

家から出る機会がめったになかった少女たちにとって、センターは学習センターであると同時に社交の場であり、人生経験や気になっていることを共有したり、もっと広い世界を探求したりすることができた。少女たちは見学旅行を組織して近隣の州にも出かけた。多くの少女にとって、近所の慣れ

19.2%が完全に中途退学するが、それに対して女子は8.5%が中途退学するにすぎない⁽⁷⁵⁾。

男子の危機は思春期の初期に訪れることが多い。このころになると、男子の身体や自己感覚は変化し始め、またおとなの世界やまわりからの期待につきあうことを余儀なくされる。たとえば、アンダーソンはリオデジャネイロ（ブラジル）のスラム街に住む10代後半の青年である。なんとか学校を卒業しようと決心はしたものの、10代前半のころを振り返ると、街で男友達とぶらぶらしたりサッカーをやったりすることのほうが、学校で経験できるどんなことよりもかっこよくて魅力的だったと言う。

「あのころはさ、いろいろ考えたくないんだよね、ただぶらぶらするだけでさ。おふくろは学校に行け行けて言ったけど、おれは行かないよって答えてた。で、家から走って出てくんだ。家には男がいなかったからね……俺を追っかけてつかまえ

て、学校に行かせられるような男がね。おふくろには俺を捕まえられなかった。今は、あのときほど子どもじゃないし……勉強するよ。教育を受けなきゃ……ただでさえ大変なんだから」⁽⁷⁶⁾

アンダーソンの証言によって浮かび上がるのは、ラテンアメリカ・カリブ海諸国全域で一層明らかになりつつあるというだけの問題ではない。西欧諸国でもますます共通のものとなりつつある問題——すなわち、思春期を迎えた男子が学校や学業から離反してしまうという問題である。

立ち遅れる男子

数十年の間、先進工業国における男子の成績不振は隠れた問題であった。語学や文系教科で男子よりも女子のほうが成績がよいことは一般的に

親しんだ環境から離れるのはこれが初めてのことだった。

チッデムが通ったムラディエ・センターは、あらゆる面で期待以上のことを可能にしてくれた。少女たち——アダレット、アイパール、チッデム、ギュルバート、ネザケート、イエテルなど——は演劇クラブを作り、地域の男の子たちに声をかけ、自分たち自身の人生経験をもとに、協力しながら「カルデレン」と題した演劇の脚本を書き、それを上演した。

「カルデレン」という題名は象徴的であり、雪に覆われた山で咲く花（スノードロップ）を指している。この劇は、トルコ東南部の少女たちの人生を制約する文化的慣習を調べ、少女たちの実際の人生経験をコラージュしたものであり、早期結婚や伝統的慣習によって、女性がコミュニティに全面的に参加することをいかに妨げられているかが描き出される。けれども、この劇は希望に満ちたものであり、少女たちは逆境と闘い、カルデレンのように花を咲かせる。

この劇はまず少女たちの母親の前で上演され、支持を得た。その後、州都

に舞台を移してもっとおおぜいの観客の前で上演され、地方テレビのチャンネルで少女たちの特集が組まれるほどの大成功を取めた。その後、首都アンカラで2度に及ぶ上演の機会を得たのである。最初は演劇フェスティバルが、2度目は子どもフォーラムが舞台だった。子どもフォーラムでの上演にはトルコ全土から子どもたちが集まっており、教育省と文化省の大臣も観劇していた。一部のシーンは全国テレビでも放送された。

この劇を通じて、少女たちは学校に行けないことの不満を表現することができた。また、伝統にどっぷりつかり、娘を家に押しこめて家事を手伝わせる親たちの目も開かせた。この劇は、全国の人々の態度を変えたのである。

何よりも、この劇は少女たち自身を変えた。「カルデレン」の前は、彼女たちは小学校の落第生だった。今や彼女たちは自信にあふれた若い女性であり、教師や医師や弁護士になりたいと考えている。少女たちのひとり、アイパール・サラは、中学校の卒業証書を手にするだけでは終わらず、高校に、果ては大学にもチャレンジしたいと言う。「そうしたいのは」と彼女。「壁

に卒業証書を飾っておくためじゃない。教育を受けて知識を身につけた母親になって、私たちが失ったものを娘たちが失わなくていいようにするためです」

チッデムの妹のギュルバートも学校に行けなかったが、ムラディエ・センターで、人間はたったひとつの文字を学ぶことでどのくらい成長できるかがわかったと語る。紙や鉛筆のにおいがかぐことさえ楽しかったと言う。彼女も「カルデレン」で役を務め、姉とともに自分たちの家のなかで扉を開いた。劇のメッセージは2人の両親にも届き、末の妹のエスマは今高校に通っているところである。

トルコ教育省も耳を傾けつつある。教育省は、女子が義務教育を修了できるようにするための重点戦略として開かれた小学校モデルを採用した。チッデムとその仲間たちは、自分たち自身の人生から、あきらめという重荷を投げ捨てただけではない。あとに続く少女たちのために、道を切り開いたのである。

受け入れられていたものの、数学や科学で男子の成績のほうがよいかぎり、全体としてはバランスがとれていると考えられていたのである。しかし近年、科学や数学における女子の参加と成績は相当に向上してきた。これは学校でのとりくみだけでなく、女性の役割についての社会的期待が幅広く変化したことによるものである。けれども語学系教科における男子の成績は向上せず、そのため女子のほうが全般的によい成績を収めるようになった。これは、初等教育段階の全国テストから学校修了時の公的試験に至るまでのさまざまな試験の結果に反映されている。

これにより、政府のレベルで相当の懸念が引き起こされることとなった。たとえばオーストラリアでは、議会の文教委員会が男子の教育について大規模な検討を行ない、教室レベルから教育・社会政策に至るまでの24項目の勧告を行なっている。これらの勧告には、男女のすべての子どもを効果的に参加させるために教師が活用することのできる方策を促進すること、教師の養成教育・現職者教育にジェンダーと成績に関する問題を含めることなどが含まれていた⁽⁷⁷⁾。

英国では、1998年以降、政府がすべての地方教育当局に対し、男子の成績の低迷に対抗するための長期戦略を策定すること、その進展を定期的に評価することを求めてきた⁽⁷⁸⁾。英国政府は、女子の成績を下げることなく男子の成績を上げることができるような戦略を見出すために3年間の調査研究プロジェクトを外部委託するとともに、専門のウェブサイトを設け、男子の成績の低迷に対応するための方策の定め方に関する事例研究、資源、指針を学校に提供している⁽⁷⁹⁾。

離反する男子

男子の学業成績の低さに関する研究は増えており、それによってわれわれの理解も深まりつつある。重点分野は研究者によってそれぞれ異なっているものの、この現象は複雑であり、さまざまな原因から生じているというオーストラリア議会の報告書には、全員がおおむね同意している。はっきりしているのは、学校を基盤とした対応策だけでは不十分であること、この問題は、開発途上国における女子の成績の低迷の問題と同じように、ジェンダーと権力という一層幅広い問題と切り離しては考えられないということである。

ひとつの理由として、家庭における女子の社会化のありようが、課題から気をそらさずに集中する姿勢を育み、したがって女子のほうが教室の環境になじみやすいということが示唆されてきた。たとえば、中等・高等教育の段階では女子のほうが男子よりも成績がよいといわれるジャマイカで行なわれた調査によると、男子は全体として家の外でかなり自由に行動することが許されているのに対し、女子は家から外に出ないことが期待され、ある特定の課題に時間を費やすよう求められている⁽⁸⁰⁾。ジャマイカ政府が実施したある研究によると、男女の成績差の原因としてはさまざまな要因が挙げられることがわかった。その要因には、乳幼児期の親による社会化のあり方から、社会全体で発せられるジェンダーの偏見に基づくメッセージ、さらには教室における男女の扱い方の違いまでが含まれている。

調査研究および行動による成果を期待しうるものひとつの分野は、学校と、社会的性別役割モデルという一層幅広い問題とを、教師のジェンダーバランスという観点から結びつけようとするものである。サハラ以南のアフリカでは、学校を女子にとってより魅力的かつ適切なものにするための主要戦略として、この地域では、教職はほとんど男性によって占められているので、女性教員の比率を増やすことが試みられている。先進工業国やラテンアメリカ・カリブ海諸国ではその逆が適切かもしれない。これらの地域では、とくに初等教育段階では女性教員が圧倒的多数を占めており、男子にとってのいいお手本が存在しない可能性があるためである。

語学や国語といった教科で男子の成績がこれほど際立って悪い理由のひとつは、これらの教科が「女子のなわばり」ととらえられており、本を読むことがあまりにもしばしば「男らしくない」と見なされているところにあるという主張もある。テレビのインタビューで英国の少年（7歳）が言ったように、「本を読むのが好きなのは本当の男じゃない」のである⁽⁸¹⁾。

ジェンダーの役割

以上のことをあわせ考えると、男子が教育から離反してしまうのは、男性としての伝統的な社会

化のありようと密接に関係しているのではないかと
いう考え方が導き出される。これは、子どもが
生まれたときから父親が子どもと関わりを持ち、
乳幼児期の養育と発達に参加すること、教育を支
えることの重要性を裏打ちするものである。ただ
し、学校と教育制度は、家庭のなかでこのような
積極的な模範を示してもらったことがない少年た
ちにも対応せざるをえない。このような少年たち
は、むしろ暴力や、自分自身と女子を危険な状態
にさらす行動を奨励するような、社会の否定的
メッセージに反応するのである。

ナイジェリアでは、1995年以降、「青少年男子向
けの意識向上」プログラムが10代の少年を対象と
して運営されてきた。このプログラムは、週1回の討
論に1年間参加し続けると約束した男子生徒を対象
としたものである。女性に対するレイプと暴力が懸
念対象となっている社会で実施されているこのプロ
グラムでは、少年たちが、特別研修を受けた教師の

もと、ジェンダーの役割や、それが自分の家庭でど
のように表れているかについて話し合う。カリキュ
ラムは常に更新されている。数年前には、少年たち
が愛と性欲をなかなか区別できないことが明らか
になったため、「性関係・愛・結婚における男性の責
任」がカリキュラムの単位に加えられた。プログラ
ムを進めるなかでわかってきたのは、男らしさとい
う考え方をあまり抽象的にならずに取り上げる方法
を見つけることが重要だということである。たと
えば、スポーツがうまくできなかったときや、仲間
の男子から女子を追っかけまわしたり「男らしい」と
ころを見せたりするようせきたてられたときに、ど
んな気分になるかを話し合う。プログラムへの参加
は、どちらかといえば自分で参加したいという子
どもたちの意思にまかせざるをえない。そもそも、
ディスカッション・グループに参加するための充分
な動機づけができていなければならないからである。
それでも、カラバールとウヨの2都市で行なわれた
プログラムの卒業生は最初の6年間で2,000人にの

ジェンダーに配
慮するというこ
とは、女子も男
子も十分に成長
できるような学
校制度、教室、
社会を創造する
ということであ
る。



ほり2002年にも700人を超える男子が参加登録をした。卒業生の少年たちは討論や自己表現の力が相当高まり、「スター」扱いされるようになっている。つまり、他の少年たちからお手本として見られる可能性も高いということである。

ともに闘う味方としての男子

男子自身も、女子の権利を保護・促進するためのとりくみに参加することでエンパワーされ、社会的にも教育面でもより大きく成長することができる。それがはっきりと表れたのは、女子教育運動の立ち上げの段階からともに闘う味方として男子の参加を得た、ウガンダの例である。たとえば、キバレ地区やムバララ地区の少女たちは、少年たちとパートナーを組んで地元クラブや支部を設置し、おたがいに協力しながら、学校に行っていない子

の名前と住所を調べて接触を試みた。少年たちがとりわけ貴重な役割を果たしたのは、通学路で、そして学校のなかで、少女たちの安全に関わる問題に取り組んだことである⁽⁸²⁾。女子に暴力を振るうのが少年たちであり、おとなの男性であることを思えば、問題と闘うにあたって男子に積極的な味方として参加してもらうことは、女子にとっては明らかなメリットとなる。しかし、暴力に立ち向かい、なぜ暴力を容認できないかについて理解するという点で、男子自身の社会的発達の間でも否定しようのない利益があるのである。

パキスタンでも、思春期の少年たちは、女子・女性の権利促進における積極的かつ効果的なパートナーである⁽⁸³⁾。あるプロジェクトは、思春期の少女のエンパワーメントを目的として6年以上にわたって運営され、パキスタン全土の500カ所で2万5,000人の少女たちをその対象としてきた。このプロジェクトは、少女たちに知識とスキルと新たな

パネル10

スーダン：コミュニティが変化をもたらした

チャドとの国境に近いスーダンの西ダルフール州。エル・ジェネイナを横切るデコボコしてほこりっばい小道を、ほっそりとした、明るい目の11歳の少女が、3頭のロバによる印象的な隊列を率いて進んでいる。先頭のロバには黄色いワラが満載されており、ひよろ長い脚と悲しそうな目しか見えない。他の2頭は、積荷である薪と水の重さでつぶれそうになっている。きゃしゃで内気そうなこの少女は、ウム・ジュマー・アブドラーヒー。毎日10キロの距離を歩き来して市場で売るためのワラを集め、家計の足しにしている。このワラは垣根やむしろに用いられるが、2日間かけてそれを集めても1ドルにもならない。

驚くような話ではないが、ウム・ジュマーは小学校に行けなかった。スーダ

ンは女子の純就学率が世界で最低の国のひとつ（42%）であり、西ダルフール州は全国平均をさらに大きく下回っている（22%）。彼女が住む地域ではさらに状況が悪く、女子の1%しか学校に通っていない。

けれども、変化の兆しはある——コミュニティが女子教育にとりくむことで、事態がどれだけ一変するかを示すような変化である。スーダン政府とユニセフが開始した「子どもにやさしいコミュニティ」イニシアチブは、これまでにこのようなコミュニティ378カ所以上に広がってきた。対象コミュニティは、もっとも不利な立場に置かれた北部9州と、南部でアクセスが可能な3カ所の都市型地域に位置しており、このイニシアチブの主導で学校の建設、教師の支援、学校活動のモニタリングが進められている。

この同盟関係におけるユニセフの役割は、校舎の復旧・新築、教室の家具、学習教材、教員研修のために若干の支援を提供することである。世界食糧計画は調理用具と食料品を提供し、6州の4万人を超える子どもが毎日学校給食を食べられるようにしている。また、学校のトイレや衛生設備の建設にも資金を拠出している。カリキュラムには健康と衛生に関する基礎知識が含まれており、それを強化しているのが保健クラブの活動である。保健クラブは、予防接種の大切さについてもあらためて子どもたちに訴えているほか、最近、HIV／エイズに関する意識啓発活動も開始した。

このような幅広い教育とともに、トイレや、安全な飲み水を提供するための手押しポンプが用意される。「昔は、

な機会を提供するうえで相当の成功を収めることができた。しかし時間がたつにつれて、受益者である少女たちはコミュニティの少年たちが後れをとり始めていると言い出し、少年たちも参加できるようにプロジェクトを開かれたものにすべきだと主張した。

その声に応じて、女子を対象とした研修プログラムは男子にもふさわしい形に修正された。また、各対象地でリーダーが指名され、フォローアップ活動の指導や進展の報告ができるようスキル開発が行なわれた。男子を対象に含める目的は、彼ら自身のエンパワーメントにつながるだけでなく、自分の新しい役割を認識するうえで役に立ち、女子の権利の理解・支持を可能にするような知識を提供するところにあった。パイロット・プロジェクトがうまくいったため、このとりくみは4州の45カ所に拡大された。参加した少年たちの最初の反応は励みになるもの

だった。彼らは以前よりも女子を支える姿勢を見せるようになり、建設的なコミュニティ開発活動にも参加し始めたのである。

貧困の役割

カリブ海諸国では、貧しい社会経済的状況に置かれた少年や若い男性は学校から一層疎外されやすくなることについて、政府の認識が高まってきた。このような若い男性をとくに対象とした介入も、いくつも行なわれてきている。カリキュラムに問題を抱えている若者を対象としたバハマの「若者エンパワーメント・スキル研修プログラム」や、学校に行っておらず職にも就いていない若者に焦点を当てたジャマイカの「青少年向上プロジェクト」などはその例である⁽⁸⁴⁾。

こういうトイレというのは学校のなかでも一番後回しにされていました」と、エル・ジェネイナの諸学校を監督するモハメド・ムーサ・ハッジは語る。「でも今では、適切な衛生設備は学校の子どもたちにとってだけではなく家庭でも大切だということがわかってもらえています」

各学校にたったひとつの手押しポンプがあるだけで、家庭にも多大な効果が及ぶ。11歳のアワティフ・アフメド・ムタラーは、毎日、学校のポンプから清潔で安全な飲み水を汲んで何本ものビンに詰め、家に持ち帰る。それぞれのビンは、飲むため、お茶をいれるため、食事の準備中に手を洗うためといった具合に、家のなかでの具体的な用途が決まっている。このような小さな一歩で、予防可能な病気や死亡の件数を少なくできることは証明されてきた。生徒たちは親に働きかけて、ポリオやその他の予防可能な病気の予防接種をきょうだいたちに受けさせたりもしている（西ダルフールは新生児破傷風の発生率が世界最高の地域である）。

過去の教育との対比がこれほど鮮やかなところもない。生徒たちはかつて、ほこりや砂利で覆われた地面にぎゅう

ぎゅう詰めになって座り、ペンも紙もなく、できるだけたくさんのことを暗記しようとしていた。長い距離を歩いて家に帰り着くまで、おなかに食べ物を入れることもなかった。

学校が復旧されたおかげで親たちは進んで子どもを学校に通わせるようになり、女子教育の拡大はコミュニティのなかでドミノ効果を発揮しつつある。「隣の家が娘の教育に熱心なのを



Tom Rhodes/2003

ブラジルでも、男子の教育問題を社会階級から切り離して考えることはむずかしい。ストリートの魅力を生き生きと描き出したアンダーソンの証言を裏づけるのは、国際労働機関が最近実施した、ブラジルの成年ギャング「コマンドー」への参加が意味するものを検討した研究である。この類の仲間集団では、とくに低所得地域においては、平均的な教室内ではあまりふさわしくないとわれがちな行為や振る舞いが尊ばれる。また、所得データを分析したところ、貧しい地域出身の少年は、学校に行っても十分な金銭的見返りは無いという理由で自己正当化を図っていることがわかった。リオデジャネイロ全体で計算すればわずか4年間の就学ですむ平均収入を得られるようになるまで、低所得地域出身者は11年間の教育を受けなければならないのである⁽⁸⁵⁾。

つまり、ラテンアメリカ・カリブ海諸国の「逆ジェンダー格差」はけっして単純な現象ではない。

そこではむしろ、ジェンダーに関連した要因が、個人個人の違いはもとより、階級や人種とも複雑にからみあっている。すなわち、一方で、多くの少年たちは学校でよい成績をあげ、楽しくやっているが、他方では著しく困難な思いをしている少女たちも少なくないということである。同地域の——そして同じような傾向が出ている先進工業国の——教育研究者や政策立案担当者の課題は、ジェンダーに基づく固定観念を強化することなく、男子の否定的な教育経験に対抗していく方法を見つけ出すところにある。

ジェンダーに配慮するという事は、文字通りのことを意味する。すなわち、女子と男子の双方のニーズをはっきりさせ、女子も男子も十分に成長できるような学校制度、教室、社会を創造するという事である。それこそが「万人のための教育」の最終目標にほかならない。

見ると、自分の家の娘も学校に通わせようとがんばるんです」とは、西ダルフール州で女子教育部長を務めるマカ・アル・ドム・アフメドは言う。

このようなパートナーシップにより、教室で経験することの質も向上されつつある。ユニセフは2002年、スーダン全土の2,759人の教員（うち1,200人は女性）を対象として、参加・相互作用型の教育手法や、男女平等をカリキュラムの基本に据えることについての研修を実施した。教師とコミュニティの指導者たちは、演劇、スポーツ、詩のワークショップを活用し、生徒たちを教育するとともに、広くコミュニティにも大切なメッセージを伝えることに成功した。たとえばアル・フマイラ女子学校の生徒たちは、踊りや詩を盛りこんだパフォーマンスを準備し、コミュニティのなかで平和と和解を推し進めようとした。これは、乏しい水資源と牧草地をめぐる遊牧民と農民との衝突が当たり前であり、1999年から2001年にかけての争いで26校が全焼したこの地域では、とくに重要なことである。

このような比較的孤立した村々で、生徒やおとなたちは周辺の文化につい

ての視野を広げつつある。近くの遊牧民についての理解を深めるのもその一環である。調査によれば、子どもたちの間でこのような理解が深まることによって、おとなどうしでも対話に踏み切り、平和にふさわしい環境を作り上げることにつながるとわかっている。

ウム・ジュマー自身にとっても、子どもにやさしいコミュニティイニシアチブのもうひとつの側面が役に立とうとしている。もうひとつの側面とは、子どもたちのところに小学校に行けなかった人々を対象とした成人教育センターの設置である。ウム・ジュマーは今アル・ウェーダ・センターに通い、主要教科とともに、収入の足しになるような実践的スキルを学んでいる。

このような成人教育センターは、コミュニティに及ぼす効果という点では小学校と同じぐらい重要である。「母親自身が学校なのです。まわりのコミュニティの人々にもいろいろ教えてくれるのですから」と、ファティヒヤー・アッバス校長は考えている。女子教育を熱心に唱道するもうひとりの人物は、エシャマ・エゼルディーン・アブドゥラーである。彼女自身は読み書きができないが、今では看護師

をしている2人の娘が教育によっていかに変わったか、目の当たりにしてきた。「娘たちが学校に行ったおかげで、家のなかもすごく変わったのよ。娘たちは、家の整理のしかた、掃除のしかた、熱や下痢から身を守る方法を教えてくれたわ。牛乳にハエがたからないように覆いをかぶせるとか、簡単なやり方をね」

「変化の兆しはあります」と、マカ・アル・ドム・アフメドは言う。「私たちは、娘の役割についての考え方を変え始めているんです。昔は、女の子は12歳で子どもを産んで、18になるころには3人の子どもがいたんですよ」

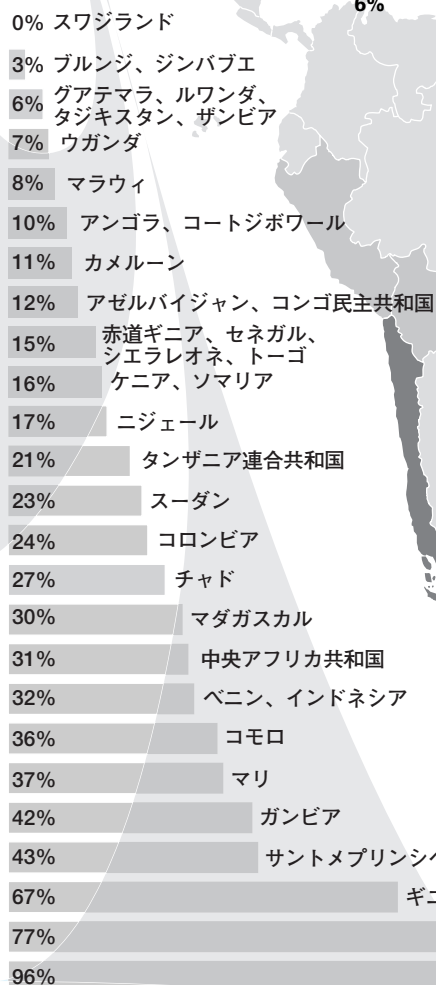
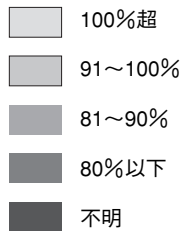
今はどうだろうか？ コミュニティの指導者、シーク・メッキ・バクヒート・シヤムには、ニアラ大学で獣医学を学んでいる娘がいる。彼女と結婚させてほしいという者たちが現れたとき、彼はこう言った。「とんでもない。教育が終わるまで待つてもらわなきゃ」

ミレニアム開発目標

HIV／エイズ、マラリアその他の疾病と闘うにあたっては、2つの目標—初等教育の完全普及、ジェンダーの平等の促進と女性のエンパワーメント—が決定的に重要である。この闘いでは、予防と治療がもっとも強力な手段となる。女子教育はその両方を推進するものである。

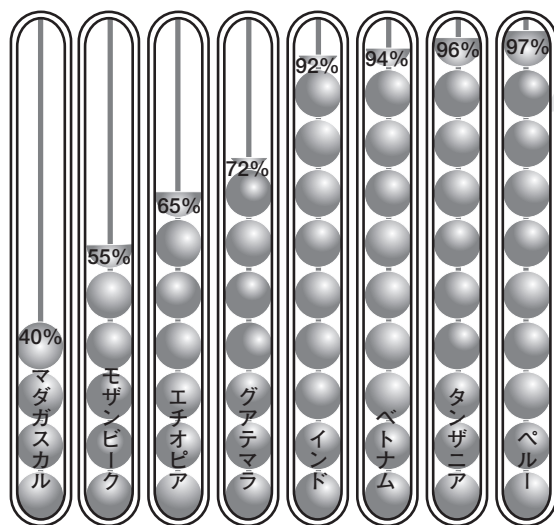
中等教育における女子

中学校に在籍する女子の対男子比
(1995年～2000年)



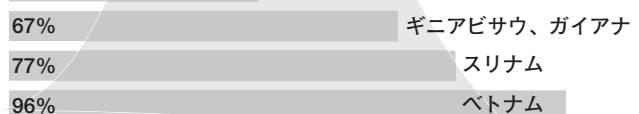
初等教育の達成

小学校に入学して第5学年に達した子どもの割合
(1995年～2001年の調査データ、一部の国々)



マラリアの予防

就寝時に蚊帳を使用している子どもの割合
(1999年～2001年)



HIV／エイズ、マラリア その他の疾病との闘い

HIV／エイズ
成人（15～49歳）の感染率
（2001年末現在）

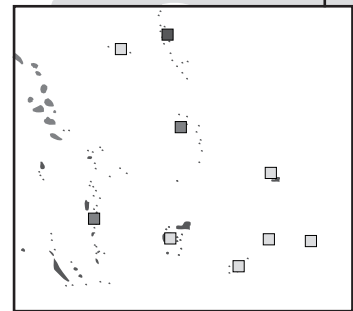
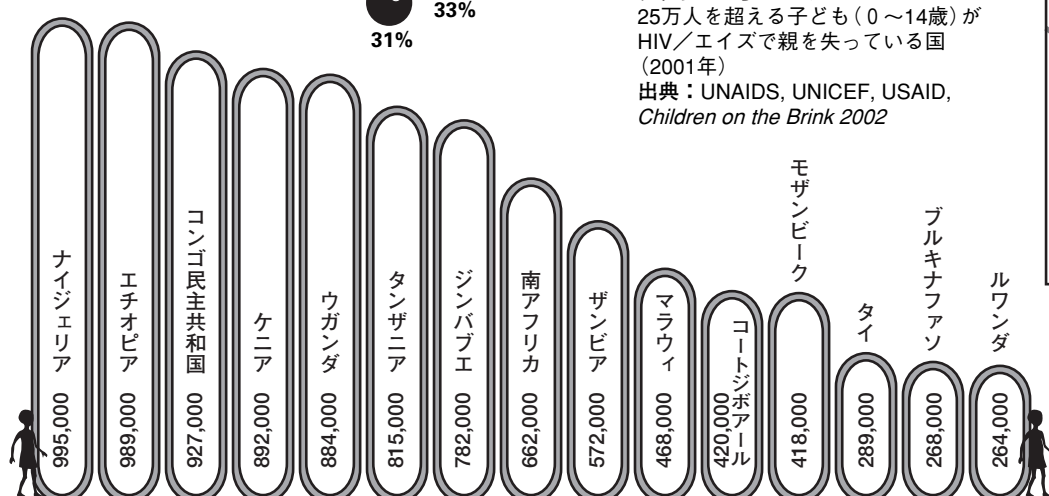
- 30%以上 ●
- 10%～29% ●
- 5%～9% ●



HIV／エイズで親を 失った子ども

25万人を超える子ども（0～14歳）が
HIV／エイズで親を失っている国
（2001年）

出典：UNAIDS, UNICEF, USAID,
Children on the Brink 2002



この地図は、いずれかの国もしくは地域の
法的地位またはいずれかの国境の確定に関
するユニセフの立場を反映するものではない。
点線は、インドとパキスタンが合意し
たジャンムー・カシミールのおおよその統
治線を表したものである。ジャンムー・カ
シミールの地位の確定については当事者の
合意が得られていない。